

認知症コラム



認知症支援団体～第3弾～ 認知症フレンドリーよこすか

4月に引き続き、認知症フレンドリーよこすか会長 上原孝介さんのお話です。

【新しい認知症感って?】

3月7日に行われたベースキャンプは8回目を迎え、おかげさまで満席、盛会のうちに終了しました。

今回はそのお話をご案内します。今回はテーマを



阿瀬川孝治氏



大塚智丈氏

「新しい認知症観って?」と題して香川県西香川病院院長 大塚智丈先生をお招きし、同窓生で認知症フレンドリーよこすかの仲間でもある汐入メンタルクリニック院長 阿瀬川孝治先生とのセッショントークからスタートしました。認知症に対する従来の否定的な固定観念を見直し、「不幸ではなく不便」と捉える新しい認知症観の重要性が示されました。長寿化が進む現代において認知症は誰もがなりうる身近なものであり、発症後も残された能力を活かしながら、その人らしく生きることが可能であると強調されました。

【大塚院長に訪れた転機とは?】

診療の現場では、家族を介するのではなく、まず本人と直接向き合うことが基本。この姿勢に転換したことで患者の受診継続につながり、本人主体の医療の重要性が明らかに。また、医療・介護従事者の中にも存在する固定観念を払拭するため、パーソンセンタードケアをひとつのアプローチとして徹底的に教育し、新しい価値観を共有する人材を増やすことで組織文化そのものを変革する必要性が示されました。

さらに、「迷惑をかけたくない」という罪悪感を手放し、「お互い様」として支え合う意識を持つことが、本人と家族双方の負担を軽減する鍵となります。専門家であっても当事者の可能性を過小評価してしまう危険があるため、常に自身の認識を問い直し、認知症をもつご本人から学び続ける姿勢が求められるのではないかと。

【支援の視点について】

支援においては、できないことではなく「できていること」に目を向け、その力を引き出す関わりが重要です。物事の捉え方を変える工夫(例:「徘徊」を「散歩」と捉える)や、楽しみや笑いを見出す姿勢が生活の質を高めていきます。また、当事者同士のピアサポートは深い共感と安心を生み、本人の支えとなることが証明されています。

【目指すべきものについて】

さらに地域とのつながりや役割を持つ活動は、生きがいや居場所の創出につながります。困ったときに「助けて」と言える関係性を日頃から築くことも重要な“備え”です。認知症医療は薬物療法だけでなく、本人の不安に寄り添う対話を重視すべきであり

新しい認知症観の普及を通じて、誰もが安心して生きられる共生社会の実現を目指していきましょう。

問い合わせ先:福祉総務課 地域力推進係 (046-822-9804)